

- ・SFらしさを継ぐもの
- ・SF小説に現実が追いつく日
- ・劇場型仇討ちのウラ
- ・リアルに未知の領域へ

SFらしさを継ぐもの

(そしてミステリらしさ)

SFと一口に言ってもいろんなジャンルがあるわけで、ニューウェーブやサイバーパンクから入った身には、オールド・スクールな科学小説は苦手であった。ただ、ジェームズ・P・ホーガンの『星を継ぐもの』だけは頭の片隅にあり続けた。「創元SF文庫読者投票第一位」、「一〇〇刷突破」の煌びやかな惹句が踊る帯を巻いた「今までもこれからも愛され続ける永遠のロングセラー」。気にならないはずがないよね。

この度『星を継ぐもの』から始まる『巨人たちの星』シリーズが新版化。これを機に旧版をまず読んでみた(持つてはいるのです)。

時は西暦二〇二八年(えっ、五年後！本書は一九七七年刊だから、五十年もあればこの小説世界くらいに人類は進歩しているという、ホーガンさんの「明るい未来に対する絶対的な信頼」ってさすがすぎない？)。月面の洞窟(人工窟らし

い)で真紅の宇宙服をまとった死体が発見される。ニュートリノ・ビームによるスキャンであらゆる物体の内外をデータ化できる技術を開発した原子物理学者ハントは、生物学者ダンチェッカーらとともに脆くミイラ化した遺体の調査に乗り出す。結果遺体は月面基地の所属でもなければ、同時代の住人ですらないことが判明。形態は人間と同じ進化系統にありながら、なんと五万年前に死亡していたのだ！宇宙の別の場所で生命が同じ進化を辿ることは確率上ありえない。つまり彼は地球人以外ではありえないのだが、そんな過去に月面へ辿り着けるほどの技術をもった文明の痕跡が地球上から消え失せているのはなぜなのか？

小説冒頭のこの魅力的な謎をはじめ、数々の問題にきちんと科学的解を与えていくホーガンの筆力に圧倒されっぱなしの目くるめくような読書であった。オルタイ

ム・ベストにあげる方々の気持ちも少し理解できたかも。解説は鏡明。新版には追補があった。本書のミステリとしての面白さを指摘してくれた故瀬戸川猛資の思い出を綴っている。私淑する瀬戸川さんの太鼓判があるなら、ミステリ好きにもどんどん推したい。SFだからと読まないのはもったいなすぎるもの。⑧



James P. Hogan

ガチ中華SF

SF界では、中華系SFのブームが到来中。そして、ブームの中心にいるのが、『三体』シリーズの作者、劉慈欣(リウ・ツーシン)です。

その劉慈欣の長編デビュー作が『超新星紀元』。SFと言えば、ハリウッドSF映画の影響もあり、アメリカ合衆国のイメージが個人的に強い。しかし、生粋の中国人の劉慈欣が描くSFには、新鮮で強烈なインパクトがあります。「大人が宇宙からの放射線に死に絶え、十四歳未満の子どものみが

生き残った」というデビュー作なのに破壊的な設定。とにかく話のスケールが大きいこと。(小松左京の『日本沈没』の影響があるらしいです。)

政治小説の色が濃いですが、内容から歴史ある大国としての威信やプライドが非常に伝わってきます。また、人類史に対する論理的な見識や学問的な捉え方が、いかにも中華風だという感じ。加えて、難解な科学用語が随所に登場し困惑しますが、逆に、根っからのSFファンにはたまらないでしょう。割と普通の小説が好き層には、消化が難しいかもしれませんが、誤解を恐れず言えばインテリ好みの濃厚な作品です。

長編が苦手という方には、同じ作者の『円』。劉慈欣以外では、様々な作家の短編作品集ですが、『中国・SF・革命』がおすすめです。⑨



劉 慈欣

進歩を知りたい

〈AI〉—最近耳にする目覚ましい技術の進歩にアナログ人間の私はついていけません。とはいえず全く関わらずに生きていけるわけでもありません。一部の開発者が発展させたものの恩恵を受けるだけでなく、多少なりとも知る必要がある状況なのかと思います。

そのなかでロボットは最新のテクノロジーを駆使し、生産性向上を目指し人間の生活に役立つものというイメージです。ところが著者の会社が開発したロボット〈ラボット〉のコンセプトは「役に立たない、でも愛着がある新しい家庭用ロボット」という従来のイメージとは全く逆で、かわいく愛されるだけの存在です。

その著者が未来に興味と不安を持って人に向けて書いたのが本書です。深い探求の過程と、人がこの先の未来でロボットやAIとどのように共生していくべきかを示唆する内容になっており、ロボットを開発するのに必要なことは人間を知ることであるとよくわかります。

ドラえもんがいてくれたらいいのにと、ずいぶん昔コミックを読みながら思ったことがあります。テクノロジーが発展しても、ドラえもんとおび太くんのような日常



がこの先あればよいなと思いまし
た。 (8)

SF小説に

現実が追いつく日

ChatGPT画像生成などAI(人工知能)に関する話題を最近よく耳にする。「AIが医師国家試験に合格した」「テキストを入力するだけで、写真と見間違えレベルの絵を作成できる」などなど。さらには「これ以上強力なAI技術の開発の一時停止」が一部の専門家、科学者から提言されるなど、ついにSFの世界に踏み込み始めたのか、と感じることもある。本作『AIとSF』は、様々なSF作家が、AIをテーマに現在の技術進歩を踏まえた上で書き下ろした短編集である。現在のAI技術から逸脱しないレベルのものから、人間を超える知能を持ったまさしくSF、と呼べるようなものまで多様な設定が盛り込まれているが、現実の技術の進歩にあわせて、本当に起こりかねない、という妙な説得力を覚える物語が多い。デイス

トピアめいた結末も本当に現実
起こるのかもしれない。さしあ
つてこういった文章もAIによる
自動生成が当たり前になってく
のだろうか。 (8)

今読みたい 未来のAIが

題材のSF漫画!

七月からアニメ化された漫画『AI(アイ)の遺電子』では、人間の脳を忠実に真似したAIを持ち、人の身体を持つ「ヒューマノイド」が人口の1割に達している。彼らは人間と同じような権利を持ち、社会の中で暮らしている。一話目冒頭のラーメン屋の大将と客との会話で、「あれ大将ヒューマノイドだったの?」なんてやりとりが行われる世界観に私は一気に心つかまれた。

人工知能の専門医である人間・須藤光を主人公に置いているが、ヒューマノイドの様々な患者を描いたオムニバス形式となっており途中から読んでも楽しめる。全八巻で一巻につき十話くらいのエピソードがつまっており、読み応え十分の作品だ。
ヒューマノイドの患者は本当に様々で、落語でもっと人間らしくかけそばを食ってやりたいとか、事件に巻き込まれて目の前で家族を失った記憶だけ消して欲しいな

ど人間の患者にはあり得ないことばかりだ。ヒューマノイドにも寿命はあり、老化した人格は徐々に機能不全を起こし、やがて稼働不能になる。人格のコピーやバックアップは禁止されているなど、読み進めるにつれ重大な舞台設定が明かされていき、もつとこの世界が知りたいと思わされていった。

ChatGPTが出してきたことで、私たちの現実も人工知能がさらに身近なものになってしまった。本作はロボットが人のように暮らすというまだ想像できない未来の話であるが、現実に近いエピソードも出てきており想像を掻き立てられる。問題を考えながら読むのも良いが、一つ一つの話がとにかく面白いのでこの世界観をまずは楽しんで欲しい。 (8)

”ジャケ買い”から広がる 読書の世界

装丁の美しさに思わず手に取ってしまう。そんな経験はありますか?

ご紹介するのは『ジョン・ハリス作品集』アーサー・C・クラークの著書の表紙で有名なSFアートの世界的天才です。そして、その表紙の美しさに惹かれ、私がSF小説、更には海外小説を読むきっかけとなった画家です。

初の日本語書籍となる本作品はジョン・スコルジーを始め、数々の作家の著作に使用された作品に加え、NASAの映像アーカイブに触発されて描かれた作品など、その圧倒的な世界観と、どこことなく郷愁を誘う色使いに、胸が熱くなりました。

未知なる本と出会えるのがリアル書店の魅力。普段は読まないジャンルであっても、まずは手に取ってみてください。読書の新しい世界が広がるかもしれませんよ。 (8)



不思議で切ない、 青春SF

青春SF

〈異常気象〉とも呼べるほどの猛暑となった今年の夏、「何か・爽やかなものが読みたい!」と思

い手に取ったのは『グラーフ・ツェッペリン あの夏の飛行船』。エツペリン あの夏の飛行船』。舞台となるのは二つの別々の二〇二一年茨城県土浦市。量子コンピュータセンターのアルバイト大学生・登志夫と地元の高校生・

夏紀には子供のころ確かに見た、あるはずのない飛行船とそこにいた互いの記憶がある。物語は二人のそれぞれの視点で交互に描かれ、徐々に二つの世界がつながり、世界の真実が姿を見せ始める。ところどころに散りばめられた秘密が少しずつ紐解かれる、何か奇妙で切ない青春SF。

著者十八番の歴史改変要素に加え、自身の故郷を舞台に描かれており、夏へのノスタルジック漂う一作だ。 (8)



虚構世界の入口は

あなたの台所にも

現実ではほとんど出会う機会がない(と信じていた)が、虚構世界では日常茶飯事の「殺人事件」。多岐にわたる殺害方法の中で、特に現実味の薄いものが「毒殺」であろう。青酸カリの名を聞いたことがあっても、どれほどの量で、どのような理由で死に至るのかを説明できる人は少ない。そんな架空世界

の象徴のような毒の科学を、実際の事件を交えて詳しく知れるのが『毒殺の化学』である。

毒物は体内で様々な化学反応を起こし、被害者を死に至らしめる。特定の反応を強めたり弱めたり、直接的に細胞等を破壊したりと千差万別だ。特に印象に残ったのがリシンと塩素。あまりに無駄がないので、毒物の話であることを一瞬忘れたほどだ。一方で毒物は、その作用を利用し、薬などとして実際に用いられているという点も興味深い。特にヒ素の持つ二面性はあまりにかけ離れており、同じ物質の話をしていとは思えない。

本書では、殺人事件から戦争、暗殺にいたる、毒殺の歴史も語られている。毒物を検知しづらい時代の事件ではあるが、いかに調達し、投薬し、証拠を隠滅するかの過程は、さながらミステリ小説のようである。衝動的な殺人と違い、毒殺は周到な計画が必要な点が大きな理由だろう。

さて、ここまで毒がいかに興味深いか説いたが、いうまでもなく毒殺を肯定したいわけではない。著者がいう通り、「化学物質とは本質的に「善い」ものや「悪い」ものではなく、単なる化学物質にすぎない」のだ。正しく理解し、正しく恐怖すること、いたづらに不安になったり疑心暗鬼になったりするのを避けられる、と私は思う。

⑧



穴を掘り続けた先にあるもの

短編集『地球の中心までトンネルを掘る』の主人公たちは、皆かなりヘンな状況にある。代理祖母を人体自然発火現象で亡くしてたり。それでも細かいところまで削り込まれた設定は、主人公のリアルで繊細な感情に寄り添うための、効果的な装置となっている。

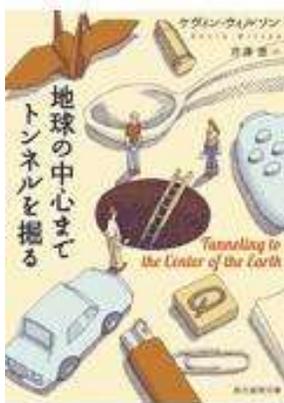
表題作は、大学を卒業したばかりの青年たちが、ただひたすら裏庭にシャベルで穴を掘り続ける物語。地上から語りかける両親の言葉が切ない。意外だけれど納得の結末を是非見届けて欲しい。

最も印象的なのは『ツルの舞う家』。祖母の奇妙な遺言にしたがって、いがみあう四兄弟が折り紙でツルを折り続ける。緊迫したシーンからの美しく滑稽なラスト。映像で観たかのような鮮やかな光景はいつまでも脳内に残り続けるだろう。

どの物語の主人公たちも、孤独と息苦しさの中で毎日をどうにかこうにか暮らしている。それでも決して深刻になりすぎることはない。彼らの実直な行動や思考は、思いがけず、私たちが人生の悩みの核心にかなり近いところまで連れて行ってくれる。読後、胸に広がる切ない余韻がたまらない。

巻末には、解説とは別に津村記久子の特別エッセイが付いていてお得。惜しめない賛辞を読むと、「そうそう！」と一緒に語り合いたくなる。しみじみと味わい深い、少し不思議でとても愛おしい一冊。

⑨



劇場型仇討ちのウラ

ウラ

元服前の美少年が、雪降る夜、芝居小屋前の衆目の面前で堂々の仇討ちを執行！雪と着物に白に飛び散る鮮やかな血の赤。相手の首を掲げ朗々と本懐を遂げたと語るさまは早速江戸っ子の熱狂的な支持

をあつめ、そのホンは芝居の人気演目になった。『木挽町のあだ討ち』はそんな仇討ちの二年後、事件が起こった芝居小屋に当時の話を聞きたいという男が現れるところから始まる。

この作品の真骨頂は江戸の芝居小屋の活気が見ているかのように感じられるところにあると思う。芝居は江戸っ子の人気エンタメだったが、人気役者ですら基本的に河原者の扱いという時代。芝居小屋の面々もそれぞれ苦しい過去に翻弄された末に芝居小屋にたどり着いている。意に沿わない仇討ちを強いられる少年もその一人だ。でも苦しい裏面があるからこそ、現世を忘れられるまばゆい芝居小屋の世界が際立つのだろう。

仇討ちの顛末はぜひ読んで確認していただきたい。読了のあかつきには「ふっ」と笑うこと間違いなし。直木賞受賞も納得！

⑩



意外で 納得な 組み合わせ

組み合わせ

暑すぎた夏も終わり、食欲の増す秋がやってきた。新作絵本も少しず

つ美味しそうな本が増えてきている。『なまえないねこ』の町田尚子の新作『どすこいみいちゃんパンやさん』も著者お馴染みの「猫とパンそして何故かおすもう」と多方面で興味が湧くテーマになっている。

ねこのみいちゃんはパンやさん。グーパーグーパーと早起きして生地をこねる。腰を落として生地を丸める姿は貫禄たっぷりである。猫のおすもうさん。猫のささいな動作を取り入れて、一見関係のない「パン」と「おすもう」をうまく組み合わせ話を進めるのは、さすがどの絵本にも猫を取り入れてきた著者ならではの感心する。

みいちゃんが不思議な夢の中で、実際に子猫とおすもうを取り組む様子は、もう目が勝負士のようについて百戦錬磨の横綱にしか見えない。その化粧まわしがプレッツェルなところも芸が細かく、猫好きにはたまらない一冊となっている。

⑪



リアルに

未知の領域へ

定年まで三年を切った。お金に
対する漠然とした不安と向き合
うべく、ひとまず自分の方針を決
めようと本を探した。

選ぶべきは女性の著者で金融
商品の説明がなく、思い込みや先
入観・偏見への対応を書いたもの
になる。方法論やノウハウを知る
のは着地点を決めてからが良い。
また、目的を定める時、男性著者
の案内は自分にはフィットしな
いことが多い。考え抜いた結果、
『女子とお金のリアル』を選択し
た。

第一章は「貯金・節約・清貧こ
そ善は女子への呪い」とあり、思
い込みの解説が始まる。章がすす
むにつれ、新しい考え方・具体的
な行動を提示し、練習が必要と説
明し、著者の気持ちや暮らしの変
遷が記されていく。「資金を手

入れるために(お金を借りるため
に)人に頭を下げる方が楽」など
と衝撃的なことも書いてある。
「嫌なことをやめる」「楽しさを
シェアする」「お金を好きになる」
そして「自分の時間と労力を使っ
ているのか」と問うてくる。

自分の前半生の目標は経済的
に自立することだった。昭和四一
年生まれの子供中学生が考える
には非現実的だったので、誰にも
言わずに時間と労力を使った。

今、第二の人生をどうしようかな
くなどとぼんやりしていたが、自
分の主人は自分、を続けたい。今
後の方向としては①楽しく暮ら
す②笑って暮らす③幸せに暮ら
す④面白おかしく暮らす⑤家族
を笑わせながら暮らす⑥気楽に
暮らす⑦...の中から吟味中で、そ
んなことを考えていると不安は
どこかへ消えたのだった。

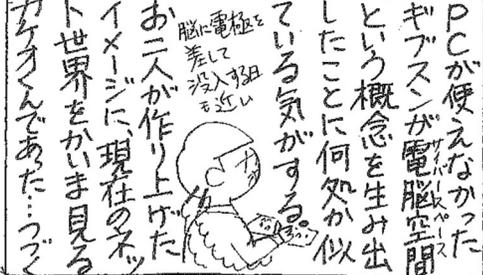
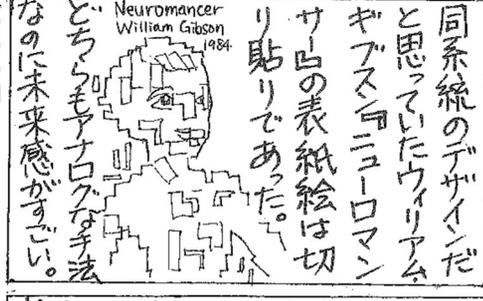
⑩
幼き頃、周りの子どもたちがウ
ルトラマン・仮面ライダーを見て
いたときに、私のはまっていたも
のは宇宙戦艦ヤマトであった。今
は無きVHSが擦り切れるほど繰
り返し見ていたような気がする。
それは私のSF初体験でもあっ
た。ヤマトの生みの親といえば、プ
ロデューサーであった西崎義展。

「チ」という愉悦

『宇宙戦艦ヤマト』をつくった男
西崎義展の「狂気」を読む限り、その
人生はまさに破天荒。本書ではヤ
マトにおける成功からその破滅ま
まで描かれる。リメイク版「219
9」において、原作者クレジットに
は西崎の名前が残る。ヤマトには
「ヤマトよ永遠に」という作品が
あるのだが、ヤマトが作られる限
り、西崎の名も永久に刻まれる。
時が進み、中高生になると『銀河

英雄伝説』を読み出す。我が国にお
けるスペースオペラの最高峰であ
るのを知るのは、もう少し経って
から。帝国のラインハルトと自由
惑星同盟のヤンという二人を基軸
に物語は進むが、それだけではな
い。『銀河英雄伝説』にまなぶ政治
学』では、銀英伝には政治学のエッ
センスがまつまつていと説く。民
主主義とは・専制とは・地政学・戦
略論・正戦論・カリスマの後継者問
題に至るまで政治学と政治哲学の
主要な要素について触れられる。
本編を知らずとも、政治学の入門
書としておもしろい。

わが生涯に悔いが残るとすれ
ば、サンリオSF文庫と同時代を
生きることができなかったこと
だ。一九七八年から一九八七年に
かけて全一九七冊が刊行されてい
た。現在、早川書房から出版されて
いる名匠フリップ・K・ディック
の作品は元々サンリオSF文庫よ
り発行されていたものだ。復刊さ
れているものも多数あるが、絶版
のままのものも数多い。『サンリオ
SF文庫総解説』(絶版)を使い、
復刊書を追い求める日々だ。イギ
リスのSF作家キース・ロバーツ
の『パヴァーヌ』もサンリオSF文
庫より発売されたが、発売二ヶ月
後にレーベルが消滅。長年、入手困
難であったが現在はいちくま文庫で
読むことができる。一五八八年、英
国女王エリザベス一世が暗殺、ロ



【書誌情報】『女子とお金のリアル』(小田桐あさぎ/すばる舎)¥1,500、『宇宙戦艦ヤマト』をつくった男 西崎義展の狂気』(牧村康正・山田哲久/講談社+α文庫)¥920
『銀河英雄伝説』にまなぶ政治学』(杉浦功一・大庭弘継/亜紀書房)¥1,700、『パヴァーヌ』(キース・ロバーツ著、越智道雄訳/ちくま文庫)¥950

【書誌情報】『女子とお金のリアル』(小田桐あさぎ/すばる舎)¥1,500、『宇宙戦艦ヤマト』をつくった男 西崎義展の狂気』(牧村康正・山田哲久/講談社+α文庫)¥920
『銀河英雄伝説』にまなぶ政治学』(杉浦功一・大庭弘継/亜紀書房)¥1,700、『パヴァーヌ』(キース・ロバーツ著、越智道雄訳/ちくま文庫)¥950



ーマ・カトリック教会に支配され、中
世の封建体制が二〇世紀まで続くイ
ギリスを舞台とする歴史改変SF。
科学技術が規制されており、路上で
は蒸気機関車のみが走っているとい
う世界に暮らす人々を描く本書は、
歴史改変ものの古典と言ってもよい
だろう。
食事をしなくても生きていける
が、SFを読まなければ死んでしま
う。私にとってSFはそういうもの
だった。

※価格は全て本体価格です。